



TITLE:

継時比較過程における時間誤差の研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

猪股, 佐登留

CITATION:

猪股, 佐登留. 継時比較過程における時間誤差の研究. 京都大学, 1965, 文学博士

ISSUE DATE:

1965-09-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211617>

RIGHT:

氏 名	猪 股 佐 登 留 いの また さ と る
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 16 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 40 年 9 月 28 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	継 時 比 較 過 程 に お け る 時 間 誤 差 の 研 究

論文調査委員 (主 査) 教 授 園 原 太 郎 教 授 野 田 又 夫 教 授 島 芳 夫

論 文 内 容 の 要 旨

継時比較判断における所謂時間誤差の現象は、Fechner 以来既に学者によって注目され、殊に Köhler がこの事実を基礎に継時比較学説を提唱して以来、これに関する研究論文は実に夥しい数に上っている。著者は本論文の約半ばを費して、これら従来諸研究を細大洩らさず点検しているが、その徒らに複雑にして帰一するところを知らぬ状況を審かにしている。

この現象が、感性領域の如何によって、又刺激提示の諸条件の如何によって、或いは被験者の練習の如何によって、其の他諸々の条件の違いによって、極めて多義的な現われ方をするにも拘らず、従来諸学説は、比較的限られた一部の事実に基づいてのみ、立論されていた観があった。

著者は、従来特定の理論に捉われることなく、寧ろこの現象の生起について、徹底的に条件分析を試み、諸感性領域の刺激特性における夫々の事実を審かにすると共に、これらを総括しうる高次の法則性を求めることを以て、本論文の目的としている。

著者は、線分の長さの時間誤差が、従来多く研究されていた重さや音強度のそれとは著しく異なる現われ方することに注目し、先ず在来の精神物理的方法による D% 値を測度として、これを綿密に吟味した。そして、従来余り確認されていなかったこの差異を確かめ、それが短時間の視覚刺激提示に伴う γ 運動に必ずしも決定されぬこと、判断回数の増加はこの現象に特徴的な負の誤差を減少すること、人格的特性との関係の有無などを確かめた。更に、線分の比較に働らく特殊事情を明らかにするため、刺激強度、背景効果、附加枠の効果等について、詳細な吟味を行ない、負時間誤差を生ずるための刺激提示に、最適配置の存在することを指摘する。

これらの吟味によって、著者は、時間誤差が刺激提示の種々相によって変動する背後には、継時的比較過程における刺激提示系列の体制効果を想定せざるを得ないと推論し、斯る系列効果による判断基準の偏位を以て時間誤差と見做すのが適當ではないかという立場に立った。そこで Helson の順応水準理論を導入し、従来精神物理的方法による測定に代えて比較評定尺度法を採用し、各種の刺激を用いてその時間

誤差の現われ方を比較し、又特に視的長さに関しては詳細にその条件の吟味を試みた。

これらの実験を通して、所謂 metathetic な連続体では時間誤差が生じ難く、時間誤差が比較的顕著に現われるのは、主として所謂 prothetic な連続体であること、判断の正確度と時間誤差とは必ずしも平行せず、時間誤差は2つの刺激を時間的に体制化する場合の mode of phrasing に依存することなどを明らかにし、この mode of phrasing が感性領域特有の要因によって左右されること、時隔の変動に伴う時間誤差の変動も、主としてそこに因のあること、時間誤差値は比較判断の基準となる順応水準を規定する範疇効果に対する時隔の影響を示すものであることなどを推論する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、著者が十数年に亘って、倦むことなく一貫して継続して来た時間誤差に関する実験的研究の集大成である。従ってその初期の実験には、今日の水準より見れば、方法、結果処理等において批判の余地なきにしも非ずであるが、然し、当時、既に夥しい数に上っていた時間誤差の研究にも拘らず、気づかれることの少なかった長さの時間誤差の特異性を著者が指摘し、これに詳細な条件分析を試みた功は、特筆さるべきである。これらの実験結果中には、著者によって初めて明かにされ、其の後内外の学者の追検によって保証された重要な事実も幾つか含まれている。

時間誤差の現象は、単なる実験的現象とみる限り、著者のこの初期の研究期においては、殆んど学界の関心を薄めていた。それは余りにもこの現象が多くの変動に依存し、不安定で変動極まりなく、そこから法則的なものを捉えうる可能性はなきかの如き観を呈していたからであった。

著者は、かかる学界の一般情勢にも拘らず、丹念に実験を重ねることによって、これら複雑な要因の係わりあい収拾し得ない混乱ではなく、体系的に整理しうることを明らかにした。即ち1つには2つの継時的刺激を時間的に体制化する際の、感性領域に特有の分節的把握（著者は名づけて mode of phrasing と呼ぶ）の仕方に係るものとして、2つには metathetic な感覚連続体と prothetic な感覚連続体とにおける判断の相違に係わるものとして、3つには判断の基準点を変動させる順応水準決定の系列的効果に係るものとして、更には中心化傾向、同化、異化等、系列内効果に係わるものとして、これらを一つの関係式の中に統合しうる見透しを与えた。これらによって時間誤差の問題は、時間的關係における心的体制の問題として新らしい展開をもつ重要な意義を賦与されたといえる。

本論文における著者の研究は、今の所この段階に止まって居り、その新らしい展開に対しては、今後に期待するのみである。著者の理論には、Helson の順応水準理論に負う点が多く、未だ独自の理論的展望をもつに至ってはいない憾みはあるけれども、この錯綜せる現象の解析に有効な統一的な方法論を確立し、時間誤差現象を重要な問題水準に引上げた功績は、高く評価されて然るべきと考える。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。